

アンダーソンの地代論に関する書誌的考察

加 用 信 文

一、序 説

二、アンダーソン地代論の定説的な三文献

三、定説外の地代論の二文献

四、土壌の可塑性に関する文献

一、序 説

ジェームズ・アンダーソン James Anderson は、一八世紀後半期におけるスコットランドの実践的農業者であるとともに、農業革命の推進者であり、その啓蒙的な農業改良に関する論述は、当時の有名な農業著述家アーサー・ヤング Arthur Young およびウィリアム・マーシャル William Marshall にも匹敵する膨大な量に上っている。私は十数年来の懸案であったアンダーソンの書誌を、このほどようやく一応纏めることができたが、ここでは彼の地代論に関する文献に限って、やや詳しい書誌的考察を記してみたいと思う。ただし、彼の地代論の面だけは、すでに経済学史上に定着されているが、書誌的にみて、大きな欠落があるとみられるからである。

アンダーソンの地代論は、すでに周知のごとく、経済学的な著述として展開されたものでなく、当時まだ穀物輸出国であったイギリスにおける穀物輸出に対する穀物法 (corn laws) の適用、すなわち穀物の輸出奨励金 (bounty)

に關し、一七七六年に著わされたアダム・スミスの『国富論』での非難、つまりスミスの穀物自由貿易の主張に対する農業改良家たるアンダーソンの反論の中に現われたものであった。スミスは、アンダーソンの反論に対し、ついになんら答えるところがなかったことも、彼の所論が経済学者の注目を惹くことなく、約半世紀に亘り埋没されていた一因といえる。アンダーソンの地代論を發掘したのは、リカード理論の継承者の一人マカロック John R McCulloch であることはいちうまでもあるまい。

マカロックの發掘以来の経緯はともかく、従来経済学史上、アンダーソンの地代論に関する論述として公認されているのは、次の三作である。

- 〔1〕『国民的産業の振興策に関する考察』 *Observations on the Means of exciting a Spirit of National Industry chiefly intended to promote Agriculture, Commerce, Manufacture and Fisheries of Scotland in a series of letters to a Friend in the year one thousand seven hundred and seventy five.* Edinburgh 1777 (以下『考察』と略称)
- 〔2〕『穀物法の本質に関する研究』 *An Enquiry into the Nature of Corn-Laws; with a view to the New Corn-Bill proposed for Scotland.* Edinburgh 1777 (以下『研究』と略称)
- 〔3〕「地代および十分の一税の穀価への影響についての比較的所見」——『レクリエーション』一八〇一年八月

 註 A comparative view of the effects of rent and of tythe in influencing the price of corn—*Reactions in Agriculture, Natural-History, Arts and miscellaneous Literature.* 30 August, 1801.—Vol.

この三作のうち〔2〕・〔3〕の地代に関する記述は、マカロックによっていちばやく抄録 (extract) されて、広く知られているが、〔1〕は抄録されていないに対し、ドイツではブレントァーノ Lujo Brentano によって、この三作の地代の記述は、詳細な書誌的な序文を付して独訳・刊行⁽²⁾ (一八九三年) されている*。

* マカロックがアンダーソンの地代論を発掘したのは、スミスの穀物輸出奨励金に対する攻撃への反論として、はじめて地代論に論及されている〔1〕の『考察』の方ではなく、同年に刊行された〔2〕の『研究』の中の脚注にある地代の記述である。彼の『経済学文献』(*The Literature of Political Economy. A Classified Catalogue of Select Publications in the Different Departments of that Science with Historical, Critical, and Biographical Notices* 1845) における穀物貿易 (Corn Trades) に関する文献の中で、アンダーソンの論述とくく〔2〕の『研究』と、『イギリスにおける現下の食糧不足を齎らした諸事情に関する洞察』(*A Calm Investigation of the Circumstances that have led to the present Scarcity of Grain in Great Britain*, 1801) を掲げ、前者につづいては、スミスの『国富論』とはほとんど同時に刊行され、それに定立られた地代命題は、一八一五年に出現したマルサスおよびウェストの地代論に先行するものであるとの解説を付し、その地代の記述を引抄している。マカロックは再び『稀覯経済文献抄録集』(*A Select Collection of scarce and valuable Economic Tracts* 1859) の中で、〔2〕の地代の記述の抄録を行なっている。これには Extracts from an Inquiry... と題していることから、しばしば〔2〕の書名を *An Inquiry* としているものがあるが、これは原著の本文の冒頭の見出しに *An Inquiry, &c.* とされているのをマカロックが採用したためである。

なお、マカロックは、前掲の『経済学文献』で、〔2〕の引抄のあと、アンダーソンの略歴を記した中で、彼が一七九七年アンダーソンの地代論に関する書誌的考察

にロンドンに移住後に刊行した『レクリエーション』の中(第五巻、四〇一〜四〇五頁)に、*「地代の発生原因についての新たな明快な説明」* (a new and lucid exposition of the origin and causes of rent) を与えていると付記して、(3)の文献をも指摘している。なお、マカロックは、『経済学文献』の解説で、アンダーソンには他に多くの著作があるが、当時
は影響があったとしても、現在、特記する価値なしとして、その「農業経済」(Agricultural Economy)の文献にも、一八世紀のものとして、アーサー・ヤングについて旅行記等の九書のほか、ウィリアム・マーシャル、アダム・ディクソン Adam Dickson 等の農書を挙げているが——その書名の選定も杜撰である——アンダーソンについては、その代表的な農書『農業および農村事情に関する論考』(Essays relating to Agriculture and Rural Affairs)すら掲げられていない。

マカロック以後のアンダーソンの地代論の書誌的な進展としては、誰よりもブレンターノがマカロックの見落した(1)の文献を含めた前記の三作の地代の記述を完訳して紹介した業績である。

ここで一言しておきたいことは、ブレンターノに師事して、そのアンダーソン研究を祖述した啓蒙的な論考といえる福田徳三「アンダーソンの地代論」(『経済学研究後篇』大正九年所収)において、アンダーソンの地代文献の中に、マカロックが穀物貿易の文献として掲げた前記の『洞察』をも含めていることである。それはマルサスの『人口論』第二版(一八〇三年)以降に、この『洞察』が引用されていることから、「彼〔マルサス〕がアンダーソンの地代論を熟知し、これに基づいて自己の地代論をなすものとする」と殆んど疑を挟む余地なかる可し。殊に穀物輸出奨励金に関しアダム・スミスの所論を非難する論述は之をアンダーソンに得たるものの如し。」としている。しかし、いわゆるマルサスの剽窃問題はともかく、この『洞察』は、一七七七年の『考察』でのスミス批判の論旨が、その後の経過においても実証されていることを記した内容のものであって、地代論には全く論及されていないから、福田氏の前記の論断は、地代論に関しては誤りとしなければならぬ。なお、この著については、人工的豊度に関連した文献として、後段にとりあげる。

さて、この三つのアンダーソンの地代文献について書誌的考察を進めるまえに、マカロック以後とくに強くアンダーソンの地代論に着目し、従来の経済学者の中で最も広くアンダーソンの著述を渉読しているとみられるマルクスが『剰余価値学説史』第二巻第九章I「いわゆるリカードの法則の発見についての注意」の冒頭で、差額地代の発見者としてのアンダーソンについての、次のごとき総評的な記述は、書誌的にも逸すべからざるものであろう。

「アンダーソンは実践的な借地農業者であった。地代の本質を付随的に論じている彼の最初の著書は一七七七年に出版された。当時はまだ、サー・ジェームズ・ステューアート Sir James Stewart が大部分の世人によって支配的な経済学者であったが、しかし同時に、一般の注意が一年前に出版された『国富論』に対してむけられていた時期である。これに反して、ある直接の実際的論争問題を契機にして書かれたこのスコットランドの借地農業者の著書は『公然と』(ex professo) 地代について論じたものでなく、ただついでに地代の性質を解明したものであって、少しも注意を喚起しえなかった。アンダーソンは、この著書のなかでたまたま地代を論じているにすぎず、公然と論じているわけでない。同じように付随的であるが、彼の理論は、再び彼自身の編集した自分の論文集、すなわち『農業および農村事情に関する論考』*Essay, Relating to Agriculture and Rural Affairs*, 3 vols, Edinburgh, 1775~1796 と題する三巻本のうち、一・二の論文の中に含まれてくる。同じく一七九九~一八〇二年に編集された『レクリエーション』*Recreations in Agriculture, Natural History, Arts etc*, London (のちに大英博物館 *British Museum* で見ること) も、直接に借地農業者 (farmers) および農業者 (agriculturist) を目あてて書かれた著書にはかならない。もしアンダーソンが彼の発見の重要性に気づいて、それを特別に『地代の本質に関する研究』(*Inquiry into the Nature of Rent*) として世間に発表し

ていたとすれば、あるいは彼が、彼の同国人マカロックが他人の考えをもってあれほど効果的にやったように、ほんのわずかでも自分の考えを取引する才能をもっていたとすれば〔事情は〕変わっていたであろう。一八一五年における彼の理論の再製は、ウェストおよびマルサスのそれぞれの著書の表題が示すように、直接地代の性質に関する理論的研究として現われたのである。⁽³⁾」

ここでマルクスが一七七七年の刊行の著書というのは、〔1〕の『考察』でなく、〔2〕の『研究』を意味しているが、これは『レクリエーション』とともに、マカロックに依拠しているとみなしてよいであろう。ここで特記すべきは、マルクスが『農業および農村事情に関する論考』（以下『論考』と略称）を、アンダーソンの地代文献として挙げていることである。これは、後述することく、マルクスの発掘というべきである*。

ここでマルクスの記した *Essay Relating to Agriculture* は、前掲のことく *Essays relating to Agriculture* であることは指摘するまでもない。また文中の *Recreations* の訳名を『農業・博物学・芸術および各種文献・閑話』としており、戦前のカウツキー版による邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第九巻（三七九頁）では『農業・博物学・芸術および諸種の文献・複刻』としており、いずれも珍訳を与えている。この *Recreations* は、一般的には娯楽の意であるが、当時の用法では、余暇善用³または紳士や郷紳としての「嗜み⁴」といった意に用いられている。その対象を田園生活的な農業としている場合が多い。たとえば、農書の書名として用いられているのは *Gervase Markham, Country Contentments, or the Husbandman's Recreation*, 1611, *Richard Biome, The Gentleman's Recreation*, 1686 等がある。こゝでは『嗜み』としたのが、一般化されていないので、原名通りの『レクリエーション』としておく。

ところで、マルクスの発掘した『農業および農村事情に関する論考』三巻の中にまぎれこんでいるという地代の記述は、その第三巻の中にあるが、その内容は後段で検討することにし、書誌的にはまずその刊行年次が問題となる。というのは、その初版は一七七五年であるから、この初版に、彼の地代の記述が発表されているとすれば、前の三作に先行して、アンダーソンの地代論の初出は、定説に反して一七七五年に繰り上げられることになるからである。または、この刊行を、後述するミーク Ronald L. Meek の特記するごとく、『論考』の第二版とすれば、一七七七年刊行となるから、前掲の『考察』および『研究』と同年に、三著が現われたことになる。このいずれも誤りである。この第三巻の刊行年次は一七九六年——その版次は第三版と同時に第四版の第三巻に当たることは、あとで検証する——であるからである。とすれば、〔1〕および〔2〕の文献より約二〇年後であるが、〔3〕の文献よりも前に位置づけられる。しかし、この序列も、後の〔3〕の考証によって、大きく修正されねばならない。

注(1) 拙稿「James Anderson 書誌」(東京農業大学農業経済学会『農村研究』第三〇号、一九六九年十二月)。

(2) Lujó Brentano, *James Anderson, Drei Schriften über Königsetze und Grundrente*. Leipzig 1893.

(3) Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert*. 2 Teil. Dietz Verlag, Berlin 1959. S. 103~104. 邦訳(国民文庫)第二卷(二〇二~二〇三頁)。

二、アンダーソンの地代論の定説的な三文献

アンダーソンの地代論に関する文献は、前述の三作であることは、すでに定説とされている。そこでまず、この書誌的系譜を検討することからはじめよう。〔1〕の『考察』と〔2〕の『研究』は、同じ一七七七年の刊行であるが、すでに指摘されているように、『考察』の序文の日付は一七七七年三月一八日であり、『研究』の冒頭にある献

辞の日付は同年の十二月一日になっていることから、その刊行の前後の系列は明らかである。

〔1〕の『考察』は、書簡体形式の論文集（二六書簡）であり、その草稿が一七七五年に執筆されたものであることは、本書のサブ・タイトルに明記されているところである。ただ、地代に関する記述は、その脱稿後に、スミスの『国富論』（一七七六年）が刊行され、その「輸出奨励金（bounty）について」の章（第四篇第五章）において展開された穀物の輸出奨励金の齊らす穀価騰貴による弊害についての非難と自由貿易論の主張を、アンダーソンが知るや、急遽執筆して穀物輸出奨励金に関して論及している第一三書簡（一七七五年一月三〇日付）に、その「追録」（Postcript）として挿入した「穀物奨励金およびその他の穀物法の本質と影響について」（On the nature and influence of the Bounty on Corn and other Corn-Laws of Great Britain）において、スミスの所説に反論した記述の中で、穀価と関連して付随的に地代の発生原因に論及しているのである。この「追録」は内容的には、いわば三節に区分されており、その第一節の冒頭に前掲の題名が記されているが、彼が地代に論及しているのは第二節に当たる部分であり、それには「スコットランドに関する穀物法について」（Of the Corn-Laws with regard to Scotland）と題されているのである。

この「追録」の第一節で、穀物輸出奨励金についてのスミスの非難を反撃する論旨は、穀物の豊作年にその輸出促進的效果によって輸出余力を保つことこそ、穀物の不作年においても国内の食糧自給を確保しうる基盤となりうるものであり、しかも輸出奨励金は穀価を法外に引き上げる弊害はなく、むしろ年の豊凶による穀価の変動を安定化する機能によって、農業改良の起動力となる農業への資本投下を促進し、結局は農業生産性の向上をもたらし、

農業者の利潤の保証と同時に、消費者にとっても、穀価の騰貴を抑制する効果を与える。しかし、スコットランドでは、従来穀物法の恩恵をほとんど享けず、しかもこの主食 (cat meal) 作物である燕麦は、外国の消費用の輸出に適しないため、輸出奨励金の機能も発動できないことから、輸出奨励金の恩恵を享けるイングランドの小麦に比して、燕麦価格がきわめて不安定であることが、逆に穀物輸出奨励金の好ましい効果を立証するものであるとする。ここで、第二節に移り、この節では、穀物輸出奨励金は穀価変動を調整して、結局各種の穀物の価格をそれぞれの内在価値 (intrinsic value) に一致せしめることであるとする。この穀物の内在価値——彼は「その内在価値と呼ぶのは、穀物の生産に必要な労働の賃金である」という——は、土地の豊度によって異なり、穀価はその最劣等地の内在価値を償うべきであるから、優良地では、その内在価値以上の穀価によって実現される割増し金 (premium) が地代である、とする命題が導き出されているのである。

このアンダーソンの用いた内在価値とは、当時のスコットランドの代表的な経済学者ジェームズ・ステュアート Sir James Stewart の『経済学原理』*An Inquiry into the Principles of Political Economy*. London, 1767 の概念用語を援用して、意識的にスミスの地代を構成要素として含むところの、市場価格の帰趨点としての自然価格 (natural price) と峻別しようとして用いたものと推察されるが、その価値概念自体は、前掲の引用句のごとく、投下労働説よりも、スミスのいわゆる支配労働説に近いものであり、ステュアートの重商主義的観念とは無縁であると考えられる。アンダーソンは、むしろ輸出入に伴う仲介的商業の利潤と支配を可及的に排除すべきだとし、「国の最も根源的な富は土地の生産物より成る」と述べている。といって、この表現をもって重農主義的な経済観と同根とみるのも誤りであることは、何よりも重農主義的地代観を脱却しえざるスミスに対し、アンダーソンの地

代論が鋭く対立していることで証明される。

この『考察』の中で言及されている地代論には、前述のごとく、マカロックは全く気がついていない。それはマカロックが経済文献の探索・収集に当たって、当時の重要課題であった穀物法の文献として、〔2〕の『研究』の方には着目したが、〔1〕の『考察』は、その書名だけからは、穀物法に関する記述が含まれていることが分らず、それに関連して地代論が潜在していることを発見できなかったためであろう。それにしても、マカロックは穀物法文献として、〔2〕の『研究』とともに、一八〇一年刊行の『洞察』を掲げているから、この内容をみれば、この著述が〔1〕の『考察』の論旨を踏まえた、その後の実証的な展開であることが明記されているにもかかわらず、この『考察』を見落したのは迂闊といえよう。このことは、マルクスについても指摘される。すなわち、マルクスはアンダーソンの地代論が単にリカードの地代論の先駆としてだけでなく、それが土地豊度の可変性の上に形成されている点を高く評価して、アンダーソンの著述を博搜して、この『洞察』を重視しているのみでなく、この『考察』自体をも実見しており、現に『資本論』に穀物法に関連した記述の出典として用いているにもかかわらず、それは「追録」の第一部に当たる記述で、地代論のまぎれこんでいる第二節の記述には全く気がついていないからである。

〔2〕の『研究』は、いま述べたマカロック以来、マルクスのほかに、ジェボンス Jevons、キャンナン Cannan はじめ大部分の経済学者によって、アンダーソンの地代論の代表作として認められており、その原文もマカロックの抄録によって広く知られているものである。

これには、「1」の『考察』におけるごとく、行論の中に地代論がまぎれこんでいるのではなく、本文の脚注として、独立した形で地代の説明がなされ、それがリカードの地代の説明に似た抽象的な定式化された地代命題が提起されていることは、周知の通りである。

ところが、この脚注の地代命題の記述が、マカロックによって抄録されているといっても、その抄録の仕方にな大きな問題がある。というのは、この脚注は五ページ（四五～五〇頁）に亘る長文であるが、その抄録は、その脚注の全文でなく、後半の約二ページ分が省略されていることである。内容的には、マカロックの抄録部分は、前述のごとく、抽象的な地代命題の定式化がされている点では、まさしくリカード地代論の先駆的な内容をもつものであるが、それに続く省略部分には、むしろリカードと対照的に、農業における技術（*art*）の改良による土地豊度の人的的な増進について述べられているのである。すなわち、前半のいわば静態的説明では、設例的に、豊度等級A・B・C・Dの耕地間で、穀価は最劣等地Dの利潤を含む耕作費用を償う価格で決定されることによって、上級地C・B・A等の土地では、それぞれの耕作費用と穀価との差額として地代が形成されるとし、結局当時穀価が高いのは地主に支払われる地代が高いためであるとする通説に対し、「土地の地代が土地生産物の価格を決定するのでなく、その生産物の価格が地代を決定するのである」という、リカード的な地代命題が導き出されているのである。したがって、人口増大に伴う需要の増加によって穀価が上昇するとすれば、既耕地の外に、たとえばF等級の土地の耕作費用を償いようになつて、耕境の拡大が行なわれ、既耕地の各等級の地代は上昇することになる。

前半の抄録部分では、このような静態的な地代形成の論証がされているに対し、後半の削除部分では、現実の農業技術の改良によつては、最劣等地Fでも漸次D・C・B・Aの上級の豊度にまで上昇しうる——もちろん上級地

D・C・B・Aの豊度もそれぞれ上昇する——ことから、需要の増大にもかかわらず、結局土地生産性の増進によって、むしろ低い穀価によって、十分な利潤の確保と高い地代を支払うことが述べられているのである。前掲の『考察』において、穀物輸出奨励金が穀価騰貴をもたらすものでなく、穀価の安定化機能により、農業改良への資本投下を促進し、結局穀価の騰貴を抑制する効果をもつことを強調しているのは、ここのいう豊度の上昇による穀価の抑制と、新しい人工的豊度の上に形成される地代の論理を内包しているといえよう。

マカロックは、リカード理論の継承者として、もっぱらリカードの地代命題の先駆的な定式化がされている部分のみに注目して、これを抄録し、むしろアンダーソンの地代論の特色というべき後半部分の重要性を認識することなく、これを削除したものと推定されるのである。この後半部分に含まれるアンダーソンの地代論の特色を重視して、これを自己の地代理論に摂取しているマルクスも、後述するアンダーソンのその後の著述の僅かな記述をも着目・発掘しているが、この脚注の削除部分にある記述には全く触れてない。ただし、彼がマカロックの抄録を読んだあと、この原典にも当たっているにもかかわらず、この脚注の削除部分の記述には気がつかなかったからであろう。

この『研究』の原書は刊行当時どれだけ普及したか分からないが、その後再版されることなく、一九世紀の前期のマカロック当時にすでに稀覯本 (rare book) であったとされている。現在でも、『考察』はかなり広く現存しているに比し、この『研究』の原物の所在はきわめて限られている。したがって、『研究』の抄録の削除部分は永らく埋没されたままで、もっぱら抄録の記述だけが、アンダーソンの地代論の研究に供せられていたのである。ところが、ブレンターノによる前記三作の独訳書で、この『研究』の全文が訳出されているから、この刊行によって削除部分

もようやく明るみに出ることになった。しかし、ブレンターノ自身もアンダーソンの説く土壌の化学的・物理的性質の改良による収量の永続的上昇の可能性に同調しているが、それは地代論的把握としてではなく、また直接この削除部分の記述にはふれていない。⁽¹⁾ その後のアンダーソン研究でも、この部分に論及した論述を知らない。

この削除部分を欠いたアンダーソンの地代命題だけからは、リカードやマルサス等の地代の説明方法の類似から、アンダーソンも土地収穫漸減法則を基調としていたとする曲解が生ずるが、これは後半の削除部分を通読すれば、アンダーソンがいかに技術の不断の改良による土地生産力の永続的上昇に、その基調をおいていたかが明らかにするはずである。また、砂録部分の設例の $A \cdot B \cdot C \cdot D \dots$ の豊度等級における穀価の上昇に伴う下級地への耕境拡大の説明方法をもって、リカードにおけるごとく不可変的な豊度を前提とした優良地から劣等地への下降的進行と同視することの誤りは、削除部分の劣等地の上級地への豊度上昇の論理からみても、容易に反証されるのである*。

* アンダーソンが、静態の説明には、土地の豊度等級差の上に、優良地から劣等地への耕境の拡大を説いていること自体を、収穫漸減法則の作用を認めたものとする牽強附会的な見方は、アンダーソンの毫も闕知せざるところである。逆に、この法則を生産要素と生産物の間の連続的変化の函数的関係——その内容も曖昧であるが——とみるかぎり、いかなる土地も、一定の技術段階における資本・労働の投下に対し収量的な限界のあるという自明的な事柄と同視すべきではない。

ここで砂録部分の記述と関連して、リカード地代論の先駆とされるアンダーソンのいわば静態的な地代命題においても、両者の説明方法に大きな差異のあることを指摘しておきたい。すなわち、リカードにおいては、周知のごとく、「地代はつねに二つの等量の資本および労働の投下によって獲得される生産物の差額である」という規定から

展開されているに對し、アンダーソンは土地間の豊度差を、収量の差等という媒介項なしに、直接費用の差等として把握していることである。これは、『研究』の抄録部分に、次のごとき説明がされている。

「最も豊度の劣った土壤の耕作費用 (expense of cultivating the least fertile soil) は、最も豊度の高い土地の耕作費用と同じか、またはそれ以上の大きさであるから、必然的に次のことが導き出される。すなわち、各種の土地の生産物である穀物の等量が同一価格で販売されるから、最も豊沃な土壤の耕作から生ずる利潤は、他の土壤の耕作から生ずる利潤よりも遙に大でなければならぬ。かくして、これ〔利潤〕は不毛性が増大するにつれて減少しつづけるから、ついには遙に劣った等級の耕作費用が、総産物の価値に一致するようになる。」

この耕作費用とは、単位面積当たりの費用の意でなく、明らかに生産物単位量当たりの費用、つまり生産費を意味している。

このように、アンダーソンにとって、リカードのごとく、異なる土壤における等量の資本投下を前提とした収量差というような仮設的な発想はなかったといえる。それは思うに、実践的な農業改良の推進者であったアンダーソンにとっては、同じ土壤でも施肥や栽培方法によつて収量の差異を生ずることが念頭にあったのみでなく、土地改良も収量上の増収的な効果とともに、排水等による重粘土壤の耕耘等の費用節約的效果が大であることを、強く認識していたためと推察されるのである。もっとも、この地代の説明では、その豊度差を一般にいわれるごとき収量差として考慮されていたことは、後の削除部分での劣等地の優等地への上昇を強調している箇所に、カッコづきで特記して、「農業の改良とは、特定の農圃 (acre) で、年平均として、従来以上の人間の食糧を供給せしめるようにすることである」と述べているからである。

しかし、ここで各等級の豊度を収量の差等として認めているとしても、リカードにおいて、それを等量の資本投下を前提とした収量差として把握し、ここから各等級間の生産物単位量当たり生産費の差等を導き出しているに対し、アンダーソンは、同一面積の等量の資本投下はもちろん、同一収量に対する投下資本の差異という仮定もされていないから、結局生産物単位ボール (bol) 当たりの生産費の差等が唯一の設例として掲げられており、これに第一義的意義をおいていることを物語っている。

このことは、リカード的な等級間の収量差を前提とする説明からは、とかく近代的地代の形成にも、土地または生産物から生ずるということに重点がおかれ、原理的には、生産費の差等における限界生産費による穀価の決定のメカニズムが派生的なものとされる理解が生じやすいことは否めないに對し、アンダーソンにおいては、前述の説明のごとく、あくまで地代形成を一元的に生産費の差等に置いている点を、むしろ高く評価さるべきであらう。

これに関して、キャンナン Edwin Cannan のごとく、リカードとアンダーソンのいずれも、「異なる土地の地代を決定するなんらの公式も与えていない」⁽²⁾とする批判がある。リカードの場合は、その文脈からもエーカー当たりの同量の資本投下による収量の差として読みとれるから、単なる表現上の不備とみるべきであり、現にそのように一般に理解されているが、アンダーソンの場合は、エーカー当たり収量差を認めているとしても、エーカー当たり投下資本の差異の有無には全く触れてないから、生産物単位当たりの生産費の差等による地代は分かっても、エーカー当たり地代を決定する公式は示されていないのである。しかし、キャンナンは第二義的なことを問題としており、生産費の差等が第一義的意義をもつことを充分に認識しているとはいえない*。

* キャンナンの指摘するエーカー当たりの地代を決定する公式には、地代の定義式としての *Reich A. Losch* と *Dan E. S. アンダーソンの地代論に関する書誌的考察*

Dunn の両式⁽³⁾をとうう。この場合、立地のパラメーターを捨象して、土地の豊度差を問題とするには、次の定義式として表わされる。

$$R = E_p - A \dots\dots\dots (1)$$

$$= E(p-a) \dots\dots\dots (2)$$

ただし、R：単位面積（ヘクター）当たり地代

E： 収量

A： 費用

p：生産物の単位置（ブッシュル）当たり市価

a： 費用（生産費）

この(1)式はレッシュ、(2)式はダンの地代定義式の距離のパラメーター $k=0$ としたものに当たる。

リカードの場合は、二つの土地（かりに土地ⅠとⅡ）とすれば、EとAが所与で、 $E_1 > E_2$, $A_1 = A_2$ と仮定されているから、一応(1)式が適用される。この場合、土地Ⅱでは $R_2=0$ ということは自明であるが、土地Ⅰの地代 R_1 は(1)式では市価 p が不明であるから、生産物の単位置当たり生産費 $a = \frac{A}{E}$ として算定し、Ⅱ級地の $a = \frac{A}{E_2}$ に市価が一致することから、 $\frac{A}{E_1} < \frac{A}{E_2}$ つまり $a_1 < a_2 = p$ したがって $p - a_1 > 0$ となり、結局は、(2)式によって地代が算定されることになる。

アンダーソンの場合は、(2)式において $a_1 < a_2 = p$ が示されているから、 $R_1 = E_1(p - a_1) > 0$, $R_2 = E_2(p - a_2) = 0$ となることが確認される。この場合、 $E_1 \cdot E_2$ の収量差とは無関係で、 $E_1 < E_2$ の場合でも $R_2 = 0$, $R_1 > 0$ として、土地Ⅰに地代が発生するのである。

キナンのエーカー当たり地代を決定する公式というも、このような $a_1 < a_2$ の第一義的重要性を認識しているとはみられない。しかも、収量だけの豊度差による地代の序列は、耕境の移動によって逆転しうるケースが生ずる。たとえば、三つ

の土地 (I・II・III) において、収量は $E_1=10$ ブッシェル、 $E_2=4$ ブッシェル、 $E_3=6$ ブッシェルとし、生産費は $a_1=6$ シリング、 $a_2=5$ シリング、 $a_3=7$ シリングとすれば、土地 I・II が耕作される場合、市価は $p=a_1=6$ シリングで規制され、 $R_1=10 \times (6-6)=0$ 、 $R_2=4 \times (6-5)=4$ シリングで、収量 E の低い土地 II に地代が形成される。次に II よりも収量の高い土地 III は、 $p=a_3=7$ シリングとなつてはじめて耕作圏内に入るが、この場合は、 $R_3=6 \times (7-7)=0$ であり、 $R_1=10 \times (7-6)=10$ シリング、 $R_2=4 \times (7-5)=8$ シリングとなり、土地 I と II との間の地代形成の豊度序列は逆転する。

〔3〕のアンダーソンがロンドン移住の翌年に編集・刊行した月刊誌『レクリエーション』の一八〇一年八月号に掲載した「地代および十分の一税の穀価への影響についての比較的所見」は、前述のごとく、マカロックが、地代の発生原因についての新たな明快な説明を与えていると述べたことから、〔2〕の文献と同時に経済学史上の市民権を獲得しているものである。この『レクリエーション』誌の合冊本六巻はかなり広く現存し、わが国でも数箇所の大学図書館に所蔵されているが、アンダーソンの地代論に関する研究には、従来ほとんどこの「明快な説明」についての考察はされていない。マルクスも、前掲の引用文において、この論文を挙げているが、この内容には全く論及していない。

この〔3〕の論文は、一七七七年の文献〔2〕の『研究』の脚注の記述を下敷きとし、穀物の容量単位をボール (boll) からブッシェル (bushel) に変える等の訂正や表現上に若干の違いがみられるが、アンダーソンの本質的な地代命題の説明方法自体には、なんら変更されていないことは、両者を対照すれば明らかである。

いずれにしても、この〔3〕の地代論文が、〔1〕・〔2〕の刊行から二四年後に現われたアンダーソンの地代論の第三作とすることが、学説史の定説となっている。しかし、この定説は大きな修正を要する。

それは、この〔3〕の論文の内容は、アンダーソンがスコットランドに在住当時、エジンバラで編集・刊行した週刊誌『蜜蜂』*The Bee*に、一七九〇年に発表した論文の記述の再録にすぎないからである。著書でいえば、いわば第二版に当たったものであって、これをもって第三作とするのは不当である。彼の一七九〇年の発表論文には、全く気がつかれなかったのを、この〔3〕の『レクリエーション』に再録された論文が着目されて、経済学説史上、その内容が明るみに出たことになる。しかし、後述するごとく、一応別個の論文の形で発表されているから、アンダーソンの地代文献として挙げることに異議はないが、この論文をもって、『新たな』(New) 地代の説明の記述とするマカロックの誤りが、現在まで訂正されないままにされていたのである。

しかも、このことは、書誌的に〔3〕の地代の記述の発表の年代を一〇年遡らせるだけにとどまらず、前掲のマルクスの引用句にあるように、マルクスが地代文献として発掘しているアンダーソンの代表的農書『農業および農村事情に関する論考』第三巻との関連において、アンダーソンの地代論展開の書誌的系譜の上から、重要な問題を提起する。すなわち、従来アンダーソンの地代文献として看過されていた『論考』第三巻は、当然系譜の中にとり入れるべきであるが、その刊行年次は一七九六年であるから、定説的な三作の順序からは、これを第三作として〔3〕の前に挿入されるべきはずである。しかし、〔3〕の原論文が一七九〇年の『蜜蜂』誌掲載の論文であることが判明した上からは、この原論文が第三作となり、その後、〔論考』第三巻が第四作に置かれるべきである。

以上によって、アンダーソンの地代に関する書誌的な系譜は、定説的な三作でなく、一七七七年の〔1〕および〔2〕の文献の後に、一七九〇年の『蜜蜂』誌の論文が続き、そのあとに一七九六年の『論考』第三巻が現われ、

最後に、一八〇二年の『レクリエーション』誌に、第三作の再録論文が掲載されたことが検出されるのである。

注(1) このブレンターノの記述に関しては、拙稿「農業における土地の経済的意義」(『農業経済の理論的考察』所収)を参照。

- (2) Edwin Cannan, *A History of the Theories of Production and Distribution*. 1893. 3rd ed. 1922, pp. 373~374.
(3) レッシュとダンの地代の定義式については、拙稿「農業立地理論の考察」(前掲著書所収)を参照。

三、定説外の地代論の二文献

ここでは、従来の定説的な三作に含まれない文献について考証しなければならない。すなわち、アンダーソンの地代論の修正さるべき五作の中の第三作に当たる『蜜蜂』誌に掲載された論文と、第四作に当たる『論考』第三巻の地代に関する記述の二作である。

『蜜蜂』誌の地代論文とは、アンダーソンがロンドン移住前のエジンバラ在住中に、自ら編集・刊行した週刊文芸誌 *The Bee, or Literary Weekly Intelligencer* * に掲載された次の論文である。

「地代と穀価との関連とその相互の影響に関する考究」——『蜜蜂』一七九一年二月二十八日号。Disquisition on the connection that subsists between rent and the price of grain, and their mutual influence upon each other—*The Bee, or Literary Weekly Intelligencer*. Dec. 28, 1791. (Vol. VI. pp. 293~301.)

* この週刊誌は、一七九〇年十二月二二日に創刊、毎週水曜日に発売、一七九四年一月三十一日(一六三号)まで約三カ年に亘り刊行されたもので、毎号四〇ページまたは三二ページの小冊子である。別に九週分ごとに合本として順次刊行され、全

一八巻に上る。その編集内容は農業誌としての色彩は少なく、文芸・工芸・美術・伝記・紀行および産業一般に亘っているが、穀物法に関する記述は、かなり含まれている。

この論文には署名はないが、次に述べるごとき経緯から、編集者アンダーソンによって執筆・発表されるに至ったものである。

アンダーソンは、一七七七年の穀物法に関する二つの著述の一三年後、この『蜜蜂』誌に、一七九一年の一〇二月に亘り、次の穀物法に関する論文を発表した。（これは標題の下に、By the Editor とあることによって、アンダーソンのものであることが判る。）

「上程された新穀物法案からみた穀物法に関する意見」——『蜜蜂』一七九一年二月二三日号・三月九日号・三月一六日号。Thoughts on The Corn Laws, With a view to the proposed new Corn Bill—*The Bee* Feb 23, 1791. Part second Mar 9, Part third Mar. 16. (Vol. I. pp. 304~319, Vol. II. pp 7~9, 51~58)

この内容の紹介は省くが、彼の論旨は、前の一七七七年に発表した自己の穀物法（穀物輸出奨励金）に関する見解は、その後の十数年の穀価の推移によっても実証されることを述べたもので、後出の『洞察』と同じ趣旨の内容であり、当時の穀物法の文献としても重要なものである。（これは、バーンス D. G. Barnes 等の穀物法文献目録にも載せられていない。）この一七七七年の見解というのは、前述の〔2〕の『研究』でなく、〔1〕の『考察』の所論を指している。

ところで、この連載論文の最後 (Part third) の記述の中で、土地の豊度による穀物の耕作費用の差異を論及して

いる箇所に、次の注目すべき脚注が付されているのである。

「私は地代は多かれ少なかれ穀価の構成部分 (the constituent price of grain) に入ると考えている人がいることは承知している。しかし、これは謬見 (fallacious notion) であることを、別の機会で論述することを約束する。」

(第二巻、五四頁の脚注)

これは地代が穀価の構成要素つまり穀価の原因であることを否定することが、彼の地代論の核心的命題であることとを、要約的に物語っている。しかし、このアンダーソンの約束の論述はなかなか誌上に現われなかったので、その約束を督促する A Farmer なる匿名の読者からの編集者宛の投書があり、これが同年の七月二〇日号の『蜜蜂』に掲げられた。この中の次の見解は、当時の地代に関する一般の考えを示唆する興味あるものである。

「第二巻五四頁の脚注の中の貴見は、私にとっては全く常識に反したものと思われる大きな驚きであった。それで、私はそこで貴下が約束された説明が現われるのを待ちわびてきた。その所説とは、土地の地代は土地生産物の価格を高めるものでないということである。私は、これは背理 (Paradox) であり、この説明には貴下にとっても容易ならざるものと考ええる。いずれにせよ、私は知りたくてたまらないから、それが現われないのは、何よりも悲しいことである。」(第四巻、六九頁)

この投書の掲載の末尾に、編集者アンダーソンの付記として、「通信員からの通報を載せる貴重な紙面をつぶすのは心苦しいが、近々投書者の待望に応えることにしたい」旨を記している。

このような前約に対する督促に応じて、アンダーソンが筆を執って、その年末の『蜜蜂』誌上に発表されたのが、この「地代と穀価との関連とその相互の影響に関する考究」という論文である。

以上の経緯の示すように、アンダーソンの地代論に関する二著が現われた一四年後に、同じエジンバラで、彼自らが編集・刊行した週刊誌『蜜蜂』で、まず「1」の『考察』の穀物法の論旨を実証した論文を掲載し、これと関連して地代に関する第三作に当たる論文が発表されるに至ったのである。しかし、その内容は前にも示唆したように、「2」の『研究』の脚注の記述を下敷として、若干の表記・表現を変えたものであった。この論文は、題名だけでも、穀価と地代との関係を扱った重要なテーマであることを明示しているが、当時の一部の読者の関心を惹いただけで、経済学史上に、これまで埋没されたままであったことは、前述の通りである*。

* ただ、ひとりこの『蜜蜂』誌の地代論文に着目していた匿名の著述がある。それをセリングマン Edwin Seligman が、その定評的な考証的論文の中で、次のごとく述べていることは、特記に値する。

「工業を重視する経済学者 (manufacturing economist) と呼んで、その最も痛烈な反対者の一人は、*Four Letters to Earl Gray, to beware of the Economists* London, 1830 と題する小論の筆者である。……著者が、その著作のモットーとしてつかうのは一七九一年、シェームズ・アンダーソンにより雑誌『蜜蜂』で発表された地代に関する記述である。そして、彼(アンダーソン)の示唆は「リカード学派」(Ricardo school) により剽窃されたものである。もともと、著者の主張では、リカード学派は、この地代論から、その理論の真の発見者と正反対の結論をひき出したという。」

この *Four Letters* なる著述は、わが国では恐らく存在していないようで、私は未見であるが、これを手懸りに、『蜜蜂』誌から前記のアンダーソンの地代論文を探し出したので、決して私の新発掘ではない。ただ、経済学古典の碩学セリングマンも、この『蜜蜂』誌の書誌的追究を怠って、この論文まで突きとめていない。

このアンダーソンの論文に着目した著述の刊行は一八三〇年であるから、マカロックによるアンダーソンの地代論の発掘に先行しているとはいえないとしても、マカロックの前記の抄録の刊行以前に、その論旨を展開していることになる。しかし、この著者は、その後ロンドンで刊行され、かなり広く普及している『レクリエーション』に、この論文がそのまま再録されていることには気がついていない。また、セリングマンはじめ、このことを指摘している記述をみない。『蜜蜂』は、前述のごとく、エジンバラで刊行された週刊誌で、現在大英博物館(British Museum)にその全一八巻が所蔵されているだけで、エジンバラを含めてスコットランドの主要図書館にも所蔵されていないことから推しても、一九世紀初期のマカロックの当時、すでに他のアンダーソンの著作以上の稀覯書であったことが、その後現在まで再発掘されなかった理由と考えられる。なお、大英博物館所蔵の『蜜蜂』の原物に当たって、これを経済学の著作に撰取しているのは、私の知るかぎりマルクスのみである。しかし、彼の『資本論』第三巻に出版として挙げているのは、一七九一年五月一日号(第一九号)中のスミス回想記(合本第三巻一〇四〇頁)——これはスミス研究上の貴重な第一級資料に値する——であって、同年の年末の前掲地代論文には気がついていない。

以上で、アンダーソンの地代論の第三作とされる『レクリエーション』の論文の原型について述べたが、これがそのままの再録でないことは、『レクリエーション』の論文の題名の示す通り、これは地代のみでなく十分の一税(trithe)と穀価との関係をもとりあげていることである。すなわち、その前半の地代に関する記述の方が『蜜蜂』の論文の再録であり、これに後半の十分の一税に関する記述が付加されたものである。この後半の方も既発表のものかもしれないと思って、『蜜蜂』の各巻等を当たってみたが、十分の一税に論及したものがあっても、内容的に同じのものはみつからないから、この分だけが新たに書き加えられたものと考えられる。

この両者を併わせた理由に関しては、この『レクリエーション』の論文の前書きとして、次のごとく記されている。

「現下の穀物の高価格に関して議論が沸騰しているなかで、しばしば聞かれるのは、地代と十分の一税が穀価暴騰の原因となす論である。しかも、概してその論者にとって、この両者が、この島国のパン用穀物の価格の騰貴に、全く同じような作用をするという見解のようである。私は、この両者の作用はかなり異なっていると考えられるし、またそのことは、それらの影響が同じ傾向をもつという大きな誤った結論に導くものと考えられるので、この問題の探究に本誌の若干の頁を割くことは、時宜を得たものと考ええる。

穀作地の地代と穀価との間に密接な関係のあること、しかも一方の大きさが何らかの形で他方に影響を与えることは、識者のだれも否定しないところであらうが、穀価が土地の地代の大きさに影響を与えるか、もしくは地代の大きさが穀価に影響を与えるか、そのいずれであるかを、だれでも認識しているとはいえないのである。しかし、この点が明確にされないかぎり、この課題に対する妥当な判断を下しえないであらう。かかる見地から、以下の諸事情が討究されねばならない。」

この前文に続いて、一〇年前の『蜜蜂』の論文の全文が脚注を含めて、そのまま再録され——ただ穀物の単位量当たりとしての容量単位のボール (bowl)* をブッシュェル (bushel) に変更している——、その後半に十分の一税の記述が付加されている。

* ボール (bowl) は、大体一八世紀頃まで、スコットランドおよびイングランド北部で用いられた穀物の容量単位であるが、

一七〇一八世紀の農書および経済学的著述等に、他にこの単位を用いている例をみかけたことはない。アンダーソンは、『2』の一七七七年の『研究』の記述の中で、この単位を用いているが、一七九一年の『蜜蜂』の地代論文にも、この単位を採用している。ロンドン移住後に刊行された『3』の『レクリエーション』誌に再録する当たって、一般の容量単位ブッシェルに変えている。

このボール(ball)の語は、一般の英語辞典にもみられず、また一八〇一九世紀に刊行された多くのイギリスの農業百科事典でも、この容量単位の説明を載せているのは、私の知るかぎり、モートンの『農業百科事典』(Morton's *Cyclopaedia of Agriculture*, 1863)のみである。これによると、州(county)によつて、その容量の内容はさまざまであり、とくに小麦については一定していないが、アンダーソンの例示しているスコットランドの主食オートミールの原料作物である燕麦では六ブッシェルに当たると記されている。O・E・Dにもこの容量単位の説明の出典として、モートンの事典を用いている。

アンダーソンは『1』の一七七七年の『考察』の穀物法に関する記述にも、この容量単位を用いているが、その行論の中で、「スコットランド・ボール(Scot ball)の価格一六シリング、すなわち一クォーター(quarter)当たり二二シリング」という記述から、クォーターは地域的差異はなく一般に八ブッシェルであることから計算すれば、一ボールは五・八ブッシェルに当たることになる。この『考察』の二年後に、同じエジンバラで刊行された著述『ヨーロッパの農業の進歩を阻碍してきた諸原因に関する研究』*An Inquiry into the Causes that have hitherto retarded the advancement of Agriculture in Europe*, Edinburgh 1779 では、その巻末の注解(notes and illustrations)に、燕麦については一ボールは六ブッシェルに当たると明記している。これは前述のモートンの事典の数字とも一致する。

つぎに、従来のアンダーソンの定説的な地代文献とされず、マルクスによつて発掘された『農業および農村事情に関する論考』*Essays relating to Agriculture and Rural Affairs* について検討しなければならない。

まず、この版次および刊行年次は、マルクスも明記していないし、その後も正確な考証はされていない。しかし、マルクスの出典に挙げているのは第三巻であり、その刊行年次は一七九六年であることは原物に当たれば明らかであるが、その版次は、この第三巻のタイトル・ページにも記されていない。同年に三巻本として同時に刊行されたものでなく、この第三巻だけが刊行された経緯が、その序文に誌されている。その内容は、農業改良協会 (The Board of Agriculture) の会長のジョン・シンクレア Sir John Sinclair の要請によって協会が議会に提出する報告書の一部として、アンダーソンが執筆した原稿であって、彼がシンクレアとの間に生じた確執とシンクレアへの不信から、急にその原稿を協会から引き取って、アンダーソンの自著として刊行することとなり、その際、新たな標題を付した新著としてでなく、彼が自らの代表的農書と認め、一七七五年の初版——それは A Farmer なる匿名の一卷本——の刊行以来、その後の論述を増補して二巻本として刊行されてきた『論考』の補巻として一七九六年に発刊されたものである。それが何版の補巻とは記していないが、それまでの刊行は、第二版は二巻本として一七七七年に刊行され——この版がアイルランドのタブリンで一七七九年に第三版として刊行されている——第三版が同じ二巻本として一七八四年に刊行されているから、この第三巻は、第三版の二巻本が刊行されてから一二年目に、その補巻として、同じエジンバラで発刊されたことが判明する。

ところが、アンダーソンは、シンクレアとの確執のためか、第三巻の刊行の翌年にロンドンに移住し、その同年に、ロンドンで『論考』の第四版を刊行したが、この第四版が再び二巻本になっているのである。つまり、第三版の補巻として刊行された第三巻が、その翌年のロンドン刊行の第四版では削られていることになる。しかも、一八〇〇年刊行の第五版で、はじめて三巻本として同時刊行されている。

このような第三巻の版次による奇妙な出入は永らく疑問であったが、一七九七年にロンドンで刊行された第四版の第二巻の巻末に、二巻本の総目次と製本上の注意のあとに、前年刊行の第三巻の内容目次を付し、これに「この巻は別巻として (separately) 販売されている」と注記されていることから、はじめてこの第三巻は第三版の補巻と同時に、翌年刊行の第四版の別巻に当たることが判明し、この第三巻の版次の疑問が氷解するのである*。

* 従来の経済学史では、『論考』第三巻の刊行年次すら明確にされてなく、しばしば初版の刊行年次としている。たとえば、高橋誠一郎『西洋経済古書漫筆』(昭和二年刊) 所収の「リカード地代説の先駆者ジェームズ・アンダーソンの諸著」では、アンダーソンの著述として挙げたこの『論考』を、一七七五年の三巻本とし、「此書は一七九七年、著しく増訂されて改訂第四版を出している」(一七四頁)と記している。また西山久徳『差額地代論の研究』(昭和三十七年刊)では、この第三巻を出典として用い、その刊行年次を一七七五年とし、また「一七七五年から一七七六年に亘って書き、そして発表した」(九四頁)とも述べている。フッセル Fussell 等のイギリス古農書誌でも、この第三巻の版次は明確にされていない。

また、イギリスのマルクス経済学者として有名なミーク Ronald L. Meek も、マルクス・エンゲルスのマルサス論の抄録(一九六三年刊)の中で、マルクスのこの第三巻の引用の典拠に注記して、「マルクスの言及しているのは第二版である。初版は一巻本であって、一七七五年に出版された」⁽⁴⁾のごとき軽率な誤りを犯しているのである。

アンダーソンは、この著書を一七七五年に刊行して以来、自ら代表的農書として認め、これを増補して第五版まで刊行しているが、第二版の二巻本として第二巻を増補刊行の際にも、初版の購入者の便宜を図って増補した第二巻を補巻 (Vol. 2 Containing all the material additions made to the 2nd edition. Edinburgh 1777) として刊行している。これと同じ考慮から、第三巻は、第三版の二巻本の補巻として刊行し、その翌年のロンドンで第四版の刊行に際しても、発売中の前年の第三巻をこの第四版の補巻としているのである。(刊行地を、エジンバラからロンドンに変えているが、第三版のタイトル・

ページでは、刊行所はエジンバラのジョン・ベル John Bell とロンドンのロビンソン G. Robinson の二箇所となっており、第四版のロンドンの刊行では、両刊行所の順序が入れ替わったにすぎない。

この第三巻が、前述のごとく、第三版の補巻として刊行されたものであるとしても、現在の図書館等の蔵書やイギリス古書市場に出回っている第三版には、この補巻を加えた三巻本はあまりみかけなく、第四版には、二巻本と別巻としての第三巻を追加した三巻本と二種があることを注意しておきたい。

なお、第四版では、第一巻および第二巻の内容も増補されているが、とくに大きな増訂された第一巻中のアンダーソンの考案とする低湿地の暗渠排水法に関する論文だけは、既版の購入者のために、別冊として刊行されている。（拙稿「James

Anderson 書誌」参照）

この第三巻の内容は、前述のごとく、農業改良協会のための提出原稿であって、内容的にも前二巻と異なっている。すなわち、前二巻は主として、アンダーソンの農業の各部門に亘る農業技術的な課題を扱っているに對し、第三巻の内容は、農業改良を阻碍する諸要因に關し、農業技術的な視点を超えた社会経済的な考察を展開したものであり、当然独立した刊行書に値する優れた内容をもつものである。むしろこの方が大きな反響を与えたと思われる。それとはともかく、マルクスは、この第三巻の中から、農業改良による土壌の可変性、つまり人工的豊度に関する記述と、それと関連した地代形成を論じた記述を発掘している。マルクスは『剰余価値学説史』の中で、二つの引用を行なっているが、その箇所は、第三巻の第一論文・第七節「小作権の不安定」による欠陥を論じた節 (Essay I §. VII. Inadequate security of Tenure. Improper Conditions under which that tenure has been granted, and restrictive Clauses in Leases. Impediment to Agriculture) の中の三ページに亘る記述からである。

このマルクスの二つの引用句のうち、前の引用部分は、次のごときものである。

「二つの耕地があつて、その生産物はおおよそ先に示したとおりであり——すなわち一方は諸費用を償う一二ブッシェル、他方は二〇ブッシェルであり——両方の土地の改良のための直接の費用は少しも必要でないところでは、借地農業者は、後の方の土地に対しては、たとえば六ブッシェルよりも多くの地代さえ支払うであろうが、一方、他の土地に対しては〔彼は〕少しも地代を〔支払わ〕ないであろう。もし一二ブッシェルがちょうど耕作の諸費用を償うに足りるとすれば、そのときには、一二ブッシェルしかもたらない耕地に少しも地代は生じえない。」（第三卷、一〇七—一〇九頁）

このダッシュ記号の中に、この刊行の編者は注記して、「アンダーソンによって説明されたところをマルクスが要約して挿入した」と述べているが、これは原文の内容とは、かなり異なっているのである。

アンダーソンは、ここでは、二つの耕地間の豊度差を、リカードと同じ収量差として示す設例をとっていることが、前の地代論の説明方法と違っているが、それは人工的な豊度の増進と結びついた地代形成を説く便宜のためであるといえる。すなわち、このアンダーソンの設例では、二つの耕地の豊度差を一方（仮にB地としよう）をエーカー当たり一三ブッシェル、他方（仮にA地とする）を二六ブッシェルとし、エーカー当たりの栽培費用（これには平均利潤を含まない）を一二ブッシェルに当たると仮定すれば、一二ブッシェルを生産する土地は勿論地代を生じないが、前例のB地では総収量から栽培費用を差引いた残余分——これをアンダーソンは自由生産物（free produce）と呼ぶ——は一ブッシェル、A地では一四ブッシェルとなる。この自由生産物から借地農業者の利潤（tenant's profit）

を控除したものが地代化されるとする。この場合、B地では自由生産物の半分の $\frac{1}{2}$ ブッシェル、A地では四ブッシェルを控除したあとの一〇ブッシェルが地代化される。

かくして、二つの耕地においてA地はB地に比し、総収量では二倍—自由生産物では一四倍—借地農業者の利潤では八倍となるに対して、地代は実に二〇倍という大きなひらきを生ずる。ここで、アンダーソンは、「社会の利益 (the profit of the public) では二対一—借地農業者の利益〔利潤〕では八対一—地主の利益〔地代〕に対しては二〇対一となる。このような関係にあるから、改良を進めることは、最も地主が利益を享けることは明らかである」と述べている。このことは、マルサスの『人口論』をして「躍有名人ならしめたレトリックの先例とみられる」「農業改良によって、社会の享ける利益は算術級数的 (arithmetical ratio) に増大するに對し、地主の収入は、ほぼ幾何級数的 (geometrical proportion) に増大する」(二〇七頁) というパラドキシカルな命題が論証されると述べている。

このような記述のあとで、前掲のマルクスの引用句に当たるパラグラフが現われるが、次の原文は引用句とはやや異なっている。

「いま述べたような収量差〔前述のエーカー当たり一三ブッシェルと二六ブッシェル〕をもつ二つの耕地があって、その改良に直接の支出 (outlay) を少しも要しない場合には、借地農業者は、後者に対しては、ここにあげた地代〔一〇ブッシェル〕よりも多くの地代すら、喜んで支払うであろうが、前者に対しては、そんなに多くは支払えない。」

これに続くマルクスの引用句には編者はなんらの注記も付してないが、この引用も原文のままでなく、かなりの

改変がされている。ここでは、マルクスの引用句は省略して、参考までに、その原文のパラグラフを仮訳しておく。

「しかし、より多くの生産物が直接に、彼自身の資本支出と勤労の遂行 (exertion of industry) によって生み出されたものである場合には、そのうちから同じだけの分けまえ (proportion) を地代 (一〇ブッシェル) として支払うということは期待できない。だが、その土地の豊度が、たとえば最初は彼自身の勤労に負うものであるとしても、その高さの豊度がある期間持続的な状態が保たれたあとでは、その自由生産物から他の控除がされる要がないかぎり、彼はいま述べた分けまえの支払いに同意するであろう。したがって、借地農業者の利潤が、このように増進することは、土地所有者の大きな関心となるが、それは借地農業者の利潤に応じて、彼の地代が遙に高い割合で増進しうるからである。」

このように、マルクスの引用は、第三巻の原文の中のいわば上級地 (A 地) の収量二六ブッシェルを二〇ブッシェル、下級地 (B 地) の収量一三ブッシェルを限界地の収量の一二ブッシェルに変えた二つの収量差として現わしている。

なお、マルクスは、この引用のあと、一ブッシェルの価格を五シリング、利潤率を一〇%として、利潤と地代の計算例を示している。このマルクスの計算例では、二〇ブッシェルの収量の土地を、ブッシェル当たり五シリングの価格で販売できるとすれば、一〇年後には、土地改良のための資本の回収がなされたあと、はじめて地代が支払われうるとし、「そのときから、人為的につくりだされた土地の豊度は、本来の豊度として評価され、地主の手に

歸するであろう」という論旨を導き出している。これはアンダーソンの記述には全くないものであるが、マルクス自身の人工的豊度の地代化に關する明快な論証として注目されるべきものである。

アンダーソンの人工的豊度に関する見解は、この第三巻の中では、マルクスが引用した章よりも、次の第八節「借地農業者間の資本不足、農業進歩の一阻碍」(Essay I. §. VIII. Want of Capital among Farmers, an Obstruction to the Progress of Agriculture)の方を重視すべきであろう。この節では、本来は同一成分の土壤 (the native staple of the soil) であっても、それを経営する借地農業者の貧富に基づく資本投下の差によって異なった人工的豊度が形成されることを述べたあと、次のごとき記述がみられる。

「しかし、二つの地区の土壤を比較する場合、その現状と異なる以前の狀態 (former state) に引き戻して比較すべきだとする誤れる結論に導くことのないように、注意する必要がある。というのは、永年に亘って、農業の実践上の振興が促進されるならば、本来的には瘠せた土地でも、高い生産性に達しうるであろう。と同時に、その期間中に貧しい借地農業者の運営に委ねていたとした場合よりも、遙かに高い地代を支払われるであろう。」(第三巻、一三二〜一三三頁)

ここで付言しておきたいことは、マルクスがリカードの地代論の批判として、一八五一年のエンゲルス宛書簡ではじめて、收穫漸減法則の否認とともに、リカードの土壤の不可變性の前提を否認して、いわゆる人工的豊度の上の地代形成を主張しているのは、前述(2)の『研究』の脚注(マカロックの抄録での省略部分)からのヒントでなく、またこの『論考』第三巻の記述を発掘する以前であるから、その意味でマルクスの創見といえよう。ただ、後

述する一八〇三年の『洞察』の中の土壤の可変性に論及した箇所を、ブリュッセル在住当時マンチェスターで閲覧した原書からの読書ノートから推して、これからの影響があったことも推察できる*。

ここでマルクスの地代論展開の過程を述べることは、その場ではないが、すでに注目されているマルクスの一八五一年一〇月八日付のエンゲルス宛書簡は、地代論史上にも大きな画期的意義をもつことを強調しておきたい。これは、マルクスが一八五〇年にロンドンに亡命後、大英博物館の遼大な蔵書を利用して、スマイス、リカード等のイギリス古典学派の原書に接して、その経済学の本格的検討をはじめた時期である。この頃はまだ経済学的にはリカード地代論を肯定していたといえるが、この書簡でリカード地代論の前提とする土地収獲漸減法則とともに、土壤の不可変性を徹底的に否認し、土地豊度の人工的増進の上に、リカード的な地代が形成さるべきことを論じたものである。その内容は熟読するに値するものであり、地代論史上の注目すべき文献といえる。エンゲルスは、この書簡に対して、最大の讃辞を呈し、「君は地代学者の称号に対する新しい請求権を獲得したのである」(一八五一年一月二九日付マルクス宛書簡)とまでいわしめているのである。これに接してマルクスが「僕の新しい地代論は直実者なら誰でも求めざるをえない正直な意識が僕にもたらしたものにすぎない」(同年二月三日付エンゲルス宛書簡)と答えているのも、含蓄のある言葉である。

この注目すべきマルクスの書簡の執筆前には、マカロックの前述の抄録によって「2」の『研究』の地代論の記述は知っていたが、その抄録の削除部分にある土地豊度の可変性の記述は知らなかったはずである。しかし、ロンドン亡命前のブリュッセル在住当時(一八四五年二月〜一八四八年三月)、一八四五年にエンゲルスとイギリスに小旅行したとき、マンチェスターに逗留した間に、はじめて閲読したイギリス経済学の原典の一つに、アンダーソンの一八〇一年刊行の『洞察』があり、その中の土壤の可変性の記述に着目して、これをノートに誌している。なお、ロンドン亡命後、このマルクス書簡の執筆直前(一八五〇年末)の読書ノートの中に、モートンの『土壤の性質と特性』(John Morton, *The Nature and Property*

of *Souls*, 1838) がみえるが、前のアンダーソンの著書とともに、これもマルクス書簡の土地の豊度の考えに、多少とも影響を与えたものと推察される。

マルクスは、その後ますます多くの経済学原典を批判的に摂取して、経済学の本格的考究を深化し、自己の経済学の理論体系の建設——とくに一八五七年頃の労働価値説の確立による剰余価値概念の発見——に向かったことは周知の通りである。この場合、地代論については、リカード地代論の内在的な価値論的な批判を通じて、自己の差額地代論の確立とともに絶対地代論の創建が行なわれた過程で、アンダーソンの著述に関心をもって、前書以外の諸著を渉読している。読書ノートには、一八五七年に、前掲の地代論の「1」・「2」・「3」の三著とともに、『蜜蜂』および『農業および農村経済に関する論考』を含めて、アンダーソンの著作を集的に読んでいることがわかる。その読書ノートの大部分は『剰余価値学説史』に出版としてかなり多く用いているが、『資本論』には一七七七年の『考察』と『蜜蜂』第三巻を出典として挙げているのみである。

マルクスが古典経済学を脱却して自己の価値論的構築の上に地代論の確立過程においても、一八五一年の書簡に示された土地の可変性の認識をもちつづけ、それを単に抽象的な前提としてでなく、実践的な土地に関する農業的基盤にまで掘り下げて把握しようとしていることは、地代論研究にとって、きわめて重視されるべきであろう。マルクスの読書ノートには、一八六三年にも、イギリスの一八世紀の代表的な農学者イーヴリン John Evelyn の古典的名著『土壌学』[*Terra, or, A Philosophical Discourse of Earth*, 1767] はじき、リーヒョ Liebig, ジェンストン Cuthbert W. Johnston 等の多くの農芸化学に関する著述にも目を通している。さらに彼が一八六八年頃『資本論』の地代の篇を取り纏めるに当たって、エンゲルス宛の書簡（一八六八年一月二日付）で、当時のドイツの高名な化学者ショルレンマー Carl Schorlemmer に、最新の農芸化学や土壌学説について聞き合わせてもらうことを依頼し、それは「地代に関する章のために、少なくとも或る程度まで、問題の最近の状態を知っておく必要がある」と述べている言葉は、きわめて示唆的である。つまり、土壌の自然科学的認識の欠如が、その後のマルクス地代論研究の実践的不毛性の一因であることは否めないであろう。

以上で、アンダーソンの地代論に関連した著述の書誌的考察は終わりたいが、これらのアンダーソンの地代文献を総覧した地代論自体について、これ以上立ち入ることは別の機会に譲りたい。ただ、アンダーソンの地代論の根拠には、土壌の可変性の認識があることは、すでに繰り返して述べてきたが、地代論と関連なしに発表されたアンダーソンの土壌の可変性に論及した文献について触れておきたい。

注(1) Edwin R. A. Seligman, *On Some Neglected British Economist, Economic Journal*, Dec. 1903, Vol. XIII, p. 525, footnote. 平瀬巳之吉訳『忘れられた経済学者たち』(社会科学雑誌)一〇八頁。

(2) これに關しては、拙稿「アダム・スミスの肖像画のことなど」(御茶水書房『社会科学の方法』第八号、昭和三九年二月刊)に随想的に触れておいた。

(3) アンダーソンとシンクレアとの確執・離間の経緯については、拙稿「James Anderson 書誌」を参照。

(4) 大島清・時永淑共訳『マルクス・エンゲルス、マルサス批判』一四七頁。

(5) マルクスの読書ノートは、川鍋正敏「マルクス・エンゲルスの草稿及び読書ノート」(『立教経済学研究』第二〇巻第三号による。このモートンの著述を *On the Nature* としているが、原著には *On* はない。このアンダーソンの『洞察』からのノートについては、杉原四郎・重田晃一訳『マルクス経済学ノート』の訳者解説(二〇五頁)を参照。

四、土壌の可変性に関する文献

アンダーソンの土壌の可変性に関する記述は、実践的な農業革命の推進者として、彼の全著作を通じてみられる。たとえば、彼の代表的農書『農業および農村事情に関する論考』第一巻所収の第二論文で彼の考案した暗渠排水法は、大きな土壌改良的な志向をもつものであり、またその第六論文の石灰に関する記述は、石灰施用が地力再生産の機能の劣悪な三圃式農法では地力掠奪的な意義しか有しないに對し、合理的輪作と厩肥多投を可能とする高度の

地力再生産機能をもつ輪裁式農法での石灰の積極的意義を述べたものである。このような記述は、他にも列挙に遑ないほどであるが、彼の著作の中から探出した直接土地の豊度の可変性に関連した主要文献（ただし地代論との関連ですでに掲げた文献を除く）を、年代順に掲げよう。

- 〔1〕『ヨーロッパにおける農業の進歩を阻碍してゐた諸原因の研究』 *An Enquiry into the Causes that have hitherto retarded the advancement of Agriculture in Europe* Edinburgh 1779.
- 〔2〕「農業および工業が国民の道德と幸福さらに国の改善と安定に及ぼす影響の比較について」『蜜蜂』一七九二年十二月二日号・一九日号連載。合本第十二卷、二〇四～二一四、二四二～二五三頁。On the comparative influence of agriculture and manufacture upon the morals and happiness of a people, and the improvement and stability of a state——*The Bee, or Literary Weekly Intelligencer*. Edinburgh, Vol. XII. pp. 204～214, 242～252.
- 〔3〕『レクリエーション』第一巻合本序文一～九二頁。 *Recreations*. Vol. I. London 1799, Introduction. pp. 1～48.
- 〔4〕『イギリスにおける現下の穀物不足を齎した諸事情に關する洞察』 *A Calm Investigation of the Circumstances that have led to the present scarcity of grain in Britain*. London 1801.

この四作のうち、〔1〕・〔4〕は独立の刊行書であるが、〔2〕・〔3〕はアンダーソンの編集・刊行した定期刊行

物に掲載した論文である。この二つの刊行書は、これまでマルクスが着目しているものである。

以下、この四作について、簡単に書誌的解説を加えることにしたい。

〔1〕の著述の内容は、農業進歩に対する停滞を打破するには実験の重要性を説き、そのためには国立の実験農場の設置と、新しい農業知識の普及のための定期刊行物の刊行の必要性を提唱したものである。彼の編集・刊行した『蜜蜂』や『レクリエーション』は、その率先的な実践といえる。この著は、一般に彼の提案を訴えるのが主眼で、農業改良に關した実践的な知見はみられないが、僅か半ページに、土壤の可變性に論及した記述がみられる。この記述は、アンダーソンの全著述からみてさほど重視すべきほどのものではないが、マルクスがこの箇所に着目して、その『剰余価値学説史』の中にとりあげたことから、この記述が陽の目をみたといえる。マルクスは、これを出典として、次のごとく述べている。

「アンダーソンが、先の箇所から考えられるように、決してさまざまな豊^い度^いの等級^いを単に自然の生み出したものとみていない。そして『土地の限りない相違』は、一部は、これらの『土地が従来その受けてきた耕作方法・肥料等によって、その最初の状態から、全く別の状態に変えられる』ことから生ずる。」

この箇所に当たるアンダーソンの原文を、参考までに訳出しておこう。

「土壤には限りのない差異があるし、また従来土地の受けてきた耕作方法 (modes of culture) や、その土地に施された肥料 (manure) によって、さらには、いかなる経験の結果をも激変せしめるごとき想像もされなかつ

たような多くの事情によって、その始原的な状態 (original) から一変しうるものである。」(五頁)

〔2〕の文献は、週刊誌『蜜蜂』誌上に、一七九二年二月の二号に亘って連載した論文で、署名はないが、アンダーソンの手になるものであることは、これと同じ題名の論文として、月刊誌『レクリエーション』の一八〇〇年に連載(合本第四巻、一二七〜一三七、二九〇〜二九九、三六八〜三八二、四六五〜四七三頁)していることから明らかである。

この論文では、外国貿易の利益よりも、国内における農工共存的な発達の利益が優ることを説いているが、とくに農業がその基本であるべきだとし、その農業の生産力は、農業改良によってほとんど無制限に増加しうるから、それに伴って、その国の人口も無制限に増加しうる、しかも増大した人口に対しても充分な生活資料を確保されうると述べて、食糧と人口の増大の間にギャップが生じることはないとしている。

このような農業生産力の増加は、土地豊度の人工的な増進に基づくところが大きいことについて、次のごとく述べている。

「しかし、この場合に、土壌の生産物を増大せしめる努力 (exertion) を妨げてはならない。不毛の土地の土壌改良において、例外なく、あらゆる物は労働に依存すること——つまり、すべては勤労の賜 (gift of industry) である——ということが基本的原則として認められる。一般に広範囲の (extensive) 重要な土壌改良は、土壌の實際の耕作 (the actual culture of the soil) によってはじめて達成されるものであることは疑いの余地がないし、またいろいろの耕作 (cultivation)、犁耕 (aration) または人力耕起 (digging) の諸手段によることなしには、人

間の食糧の最大限の可能性を土壤から獲得しえない。というのは、これらの諸作業によってのみ、本来的に不毛の土壤を高い生産的なものとなしうるのであり、また肥料 (manure) の施用にも、無駄な不経済な浪費をなくして、最高の効果を齎らしうるのである。」(第二巻、二四七頁)

このパラグラフに注記して、ここでの説明は読者を充分納得せしめえないかもしれないから、読者の要望があれば、他日本誌で、この問題を取りあげる旨が述べられている。しかし、『蜜蜂』誌のその後の各号を調べても、この説明の記述は現われていない。このアンダーソン自身の懸案は、恐らく次の「3」の文献として実現されたものと推定される。

「3」の文献は、アンダーソンがロンドンに移住直後に創刊した『レクリエーション』の合本の第一巻(一七九九年二月の創刊号から翌年五月までの六号分の合本、その扉の刊行年次は一七九九年となっている)に、序文として付した長文の論述で、優に他の著述に匹敵する分量である。これは、アンダーソンが、これまで自己の体験と農業知識を総合した農業全般に亘った体系的な構成をもつもので、彼の多くの農業に関する記述の中でも、きわだって注目にするものの一つである。この内容に論及することは別の機会に譲りたいが、この中で土壤の性質、また土地豊度に関する彼の農学的な考察が展開されているのである。彼によれば、土壤の性質を規定するのは、その物理的構造であり、それにはとくに粘土 (clay) で代表される物質の含有量に関連しているとし、それらが土地の始原的狀態 (native) においてみられるような「土壤の本源的な・構造的な部分」 (original and constituent part of the soil) をなすとしている。この土壤の性質も、客土等によって変化せしめうるばかりでなく、土壤の豊度自体が、作物の種類

などの農業的利用のしかたで異なるものであり、また石灰等の施用も土壌の種類によって、その効果が異なるから、あらゆる作物を通じての一義的な豊度等級は規定されることが力説されている。

〔4〕の『洞察』は、前述のごとくマカロックも穀物法に関する文献として挙げていることから、かなり広く知られている著作であるが、この中で土地豊度の可変性に論及されているのに着目しているのは、前述のごとく、マルクスのみである。

マルクスは、『剰余価値学説史』第二巻第九章の「九、アンダーソン対マルサス」の冒頭に、「彼〔アンダーソン〕は人口論〔マルサス〕の決定的な反対者であり、土地改良の可能性が増大し永続することを、はっきり主張している」として、この〔4〕から、次の短い一句を引用している。

「土地は、化学と耕作によってますます改良されうる。」（傍点は原文のイタリック）

これは原書のままの引用ではなく、編集者が注記しているように、彼が原書の本文で技術 (art) による生産性を説いている箇所の脚注において、イタリア人カミロ・タレロ Camillo Tarelo de Leonats の一五七七年刊行の著者の引用に基づいた記述からのマルクスの要約であるとしている。たしかに、ここの原文では数ページに亘って、アンダーソンは土地改良と土地豊度の可変性についての記述がみられるが、そこでとくに彼がイタリックで特記しているパラグラフは、次のこときものである。

「ある国の現状において、その土壌の全層が始原的には (naturally)、とくに優れた豊度の状態になくても、人間の勤勞によって、より生産的ならしめることは可能であり、また賢明な経営方式によって、その生産性はほ

とんど無際限に年々増進して、ついに「われわれの想像もしえないほどの生産性の水準 (degree of productivity) に到達する。」(三五～三六頁)

これとは同じ意味の記述が、前掲の〔2〕にも現われており、さらに詳しく農学的な記述が〔3〕の文献にもみられるから、とくに一六世紀のカミロ・タレロなる外書に影響された内容とみることはできない*。

* アンダーソンはこの〔4〕の『洞察』の執筆と同じ一八〇一年に、月刊誌『レクリエーション』の二月号に掲載された次の論文が、この典拠となれたものと考えられる。これには一五世紀の刊行書としている。

Notices of an Italian book on agriculture, printed in the fifteenth century with extracted from, and remarks upon it. A Dissertation on Agriculture by Mr. Camillo Tarallo, on the fundamental Principle of Practical Agriculture. Recreations. Vol. IV. 1801. pp. 425~428.

この筆者は無署名であるから、アンダーソンの執筆とは確言できないが、〔4〕の脚注との関連で、一応アンダーソンの記述とみなしうらと思う。

なお、このタレロについて記した農書は見当たらないが、イギリス農業革命初発期の画期的な農業百科事典 *The Complete Farmer, or A General Dictionary of Agriculture*, London 1766 の序文で、国外の主要農業著述家の名を挙げている中に、彼の名がみえる。しかし、その原書が利用されているかどうかは不明である。

したがって、この書の土地豊度に関する記述自体は、アンダーソンとしては目新しいものではないが、〔1〕の文献の内容よりも詳しい記述であるから、マルクスがこれに着目して、リカード地代論の批判的研究の一つの有力な資料としてもちいたことによって、殺物法に関する文献と異なる面で、経済学史上に定着されたといえるであろう。

以上の考証により、アンダーソンの地代論に関連する書誌的な発掘および補充等を通じて、従来の定説的見方が大きな修正を要することを論証できたと思う。筆を擱くに当たって、アンダーソンの地代論史上の不滅の業績を再認識し、新たなアンダーソンの地代論研究の展開の手引きとなれば幸いである。(一九七〇・三・三〇)

(委託、東京教育大学農学部)